

2020年7月26日  
聖霊降臨節第9主日

家庭礼拝のための  
聖書・牧会祈禱・メッセージ



## 【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙 16章 17節～23節 (新約聖書 298頁)

## 【牧会祈禱】

命の源である神様

雨の日曜日となりました。生きるものを育む恵みの雨です。けれども、豪雨によって被害を受けた地域に強い雨が再び降り注ぐと聞いています。どうか、その地にあつて今苦しんでいる人たちがいつその苦しみに遭いませぬように守ってください。毎年のように起きる水害は、私たち人間が行ってきた自然破壊にも原因があります。主が与えてくださった自然という恵みを正しく分かち合い、次の時代に引き継げるよう、知恵と自制心を与えてください。

私たちは信仰者として、主のために生きたいと願います。しかし、「主のために」という言葉を「自らのために」の隠れ蓑にすることがあります。自分を押し通したい、自分の力を認めさせたいという思いを、美しい言葉の下に隠そうとするのです。それに気がついていない哀れな私たちを救ってください。私たちの本心を知ってなお愛してくださる神様。これから始まる一週間、私たちをお委ねします。あなたが用いてくださいますように。

新型コロナウイルスが世界で、また日本で猛威をふるっています。病んでいる方々が癒やされますように。医療に従事している人たちが一日いちにち無事に過ごせますように。適切な感染対策を行えるよう、為政者たちを導いてください。この状況にあつて、教会は何をすればよいのか考えています。分からないことばかりですが、このくすぶり、このもどかしささえ、主は共にしてくださっているはずですから。どうか、世界の教会が何をなし、何を語ればよいかお示しください。軽井沢教会がこの地にあつて担うべきつとめを教えてください。

療養中の友、家庭で礼拝を守る友に主イエスの恵みがありますように。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におさげいたします。アーメン。

## 【メッセージ】

パウロはそろそろ筆を置こうとしています。16章 1節から始まる個人的な挨拶。たくさん名前が並んでいますが、彼らがどのような人物だったのか、その詳細を知るすべはありません。しかし、みんな主のために労苦した人でした。そこから一転して、今日の箇

所は教会の分裂について語られています。

不和という言葉が出てきますが、これは敵意や悪意を伴った分裂を意味します。続いて、つまづきという言葉が出てきます。パウロは十字架につけられたキリストについて「ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人

には愚かなものです」と言います。これらの言葉から考えて、当時のローマ教会には「主イエスの十字架によって私たちは救われる」という福音の根本を否定する動きがあったということでしょう。

本来なら、教会こそこの世にあって、平和でなければなりません。教会こそ、共に生きる人の悲しみを背負い、その中でも変わらない主の恵みを見つけていかなければなりません。しかし、それが難しいのです。パウロは分裂の原因は福音に背くことにあるとしました。まるで主に仕えているようなことを言いながら、実際には自分の腹、自分の欲に仕えることです。自分の名誉や、承認欲求を満たすため、自分の正しさの証明のために働く時、教会の平和は破られるのです。「主のため」という言葉や思いが本当にそうであるのか、吟味しなくてはなりません。この言葉は正しく使われることもあれば、隣人を惑わせ、自分を正当化することにも使われるからです。

パウロはそんな人間の弱さを十分に知っているはずで、今日の箇所は前後に名前の羅列があります。パウロはこの人々がどんなに主のために労苦したか知っています。けれども、彼らが完璧ではないことも知っているはずで、弱いのはいい。誰でもそうだから。けれども、福音に背いてはいけない、とパウロは言うのです。

「福音」とは、広い意味を持つ言葉です。具体的には、十字架という恵みによって私たちの罪が赦されたこと、神様が私たちを愛されていること、主がいつも私たちと共にいてくださること、と言えるでしょう。教会では福音という言葉をよく聞きます。福音とは、その内容を標語のように覚えればいいものではありません。福音というのは聞くものであり、生きるものなのです。私たちは日々の生活の中で、疲れ、悩みます。

一度落ち込んでしまったり、自分本位になると、神様に立ち返ることは容易ではありません。しかし、福音は生きるもの、生きようと試みることです。福音を生きるなら、たとえ傲慢になるときにも悔い改めが与えられ、赦されるでしょう。福音を生きるなら、たとえ今許せない人がいても、許せるときが来ると信じられます。許せない私さえ愛してくださる神様を知ることができるはずで、

福音をひととき忘れてしまうことはあるかもしれませんが、それでもいいのです。あなたは弱くてもいい、失敗してもいい。けれども福音を生きるということ、を諦めてはならないのです。それがあなたを在るべき場所へ戻してくれます。

パウロは私たちがそのように生きることを喜んでいきます。その上で「善にさとく、悪には疎く」あるように望んでいます。善に対しては専門家、悪に対しては無能、と訳する人もいます。「無能」とは、あまりよい言葉ではないかもしれませんが、しかし、パウロは悪とはどんなものか、悪をよりよく知れとは言いません。悪はそれだけ多種多様で、魅力的なのでしょう。だからあなたは悪に対して無能、つまり影響されず、関係を持たない人になりなさいと勧めるのです。なぜなら、主は悪をあなたに任せて、放り出したりはなさいません。だから、悪が迫ってきても、あなたの力で悪に打ち勝とうと思わなくていいのです。悪を断ち、福音が真実であると示されるのは神様なのですから。

パウロはこの箇所を祈りで終えています。この手紙を読む人々の祝福を願わずにはいられなかった。それだけキリスト者として生きるには誘惑と困難があるということです。しかし、パウロの祈りは聞かれています。キリストの恵み（福音）は取り上げられたりはしません。私たちに諦めないのは神様なのですから。